

教育と文化

市教育研究大会

『生きる力』を
育むために

12月25日、市民センターで第55回伊万里市教育研究大会がありました。これは、市教育委員会と市教育研究会が、子どもたちの『豊かにたくましく生きていく力』を育てることを目的に、毎年開催しているものです。

会員発表では、山代西小学校の吉永啓子教諭が、学校図書館司書との関わりで、良い変化が現れた子どもたちの例などを紹介しながら、図書館を活用した教育の成果や課題を報告しました。

参加した教職員にとつて、研修の深まる興味深い事例発表となりました。



↑会員発表の様子

日本語スピーチコンテスト

佐賀の良さを
日本語で

12月17日、市民図書館で『外国人による 佐賀さいう！日本語スピーチコンテスト』がありました。多文化共生による地域づくりを推進しようと、県国際交流協会が主催しているもので、本市では初めての開催です。

この日は、インドネシア人や中国人など県内で生活している外国人13人が登壇。佐賀の魅力や故郷との違いなどについて、それぞれが思ったことを日本語でスピーチしました。平成28年の県内在住の外国人は5140人。対前年比で13・3%増え、全国1位の増加率です。



↑自国と佐賀の違いなどについて話すインドネシアのアルティさん

郷土の文化財

伊万里湾の歴史シリーズ⑦

●問合先 生涯学習課文化財係 ☎0958-3186

伊万里湾の生産活動

漁業と製塩

江戸時代になると、伊万里湾内における生産活動についても克明な記録が見られるようになります。

伊万里津内では主に商船の出入りや佐賀藩の港湾管理が目を引きますが、唐津藩領だった現在の黒川町や波多津町に面した海（黒川浦・畑津浦）では漁業が主な生業として営まれていました。

黒川浦と畑津浦の漁業については連上（事業税）に関する資料から、その種類が伺えます。どちらの浦も網を用いた漁業が約9割を占め、そのほかは釣漁業のみでした。

また、佐賀藩領だった牧島地区の瀬戸町や東山代町の長浜では、17世紀初頭に塩田を開き、製塩が開始されました。これらの地区で



↑瀬戸町塩田創設時の堤防築造記念の石祠（2基は塩竈六社祠）

は、その後何度かに分けて海面を埋め立て、塩田を拡大するほど製塩が盛んになっていきました。唐津藩領の黒川町でも塩田が開かれ、1646年（正保3年）に塩屋村ができたといわれています。

このように江戸時代の伊万里湾は、海上交通の要所としてだけではなく、一次産業の場としても重要な意味合いを持っていることが分かっています。